資料２

第２回施策検討専門部会のテーマに関する主な御意見

テーマ：○　伝統文化の継承と新たな創造との調和を基調とする景観形成
　　○　“京都らしさ”を活かした個性ある多様な空間から構成される景観形成

論点①　コンテクストを尊重した景観誘導をどのように進めるか

⑴　まちのコンテクストをどのように捉え、尊重していくべきか

⑵　景観誘導において重視すべきポイントはどこか

⑶　「地」の変化に対して、どう対応するか。また、京町家と調和する町並み景観の在り方とは

論点②　地域の新たな魅力をどのように創造していくか

⑴　保全に留まらない、創造的な視点による景観形成をどのように進めるべきか

⑵　意味を持たない様式や形態の踏襲ではなく、場所や空間の機能や意味に結び付くデザイン誘導を図るべきではないか

⑶　そこに新たに書き加えるコンテクストを、どのようにコントロールしていくか

＜主な意見＞

１　伝統文化の継承と新たな創造との関係性

・　文化的、伝統的なものと新しいものとの関係性は「調和」というよりも「共存」という言葉で捉えるべきではないか。

２　まちのコンテクストの捉え方

⑴　捉え方

・　テクストがあってコンテクストが生まれる。何をテクストと見なすのかが重要。町をつくる人のインテンションを通すことで読み取れるものがある。

・　コンテクストには機械的に適用できるようなローコンテクストと、言葉になりにくい曖昧なハイコンテクストとがある。

・　ローコンテクスト（数値的なルールなど）の継承だけでなく、ハイコンテクストの継承を考慮しても良いのではないか。その場合、読み解き方や生かし方、語り方など、そこに価値を見出す「人間側の能力」にも焦点を当てるべき。

・　認定物件の中には、想定外だが良い事例など、ハイコンテクストに合致すると見なせるものがあるかもしれない。それらを手がかりにしてはどうか。

・　複雑なコンテクストを理解しやすいように「噛み砕く」プロセスが重要。地域固有の「コア」となる要素を抽出し、提示することが必要ではないか。

⑵　共有手法

・　地域住民が自ら地域の歴史や文化を語れることは、コンテクストを継承する上で重

要。地域住民が町のコンテクストを外部の人に対して説明できるように、普段から学習と蓄積をしていくことが大切。

・　若い人や地元の昔ながらの人が混じりあってどんな景観が良いのかを議論できるような場があると良い。

・　建築計画前にまち歩きや、地域住民との交流により、地域の良い点や魅力を知れる仕組みがあると良い。

・　京都に魅力を感じる人々が文化的なコンテクストにアクセスでき、体系的に理解しやすい環境を整備していくと良い。

３　景観形成におけるコンテクストの扱い方

・　コンテクストにはネガティブに作用する可能性があるものもある。何もかも尊重するのではなく、ビジョンに照らし合わせてコンテクストを読み解く必要がある。

・　社会的なコンテクストや経済的なコンテクストの観点からローカルなコンテクストを評価する視点も必要。

・　地域固有のコンテクストから「コア」となる要素を抽出することで、ただ保守的なだけでなく、新しいものを生み出す際にも使えるようになる。

・　コンテクストの積上げが画一化を引き起こすことも課題としてある。隣接する町家との関係性など、コンテクストは敷地ごとに異なるものであり、向こう三軒両隣的なスケールなどで、それらをうまく蓄積していくような仕組みがあると良い。

・　デザインガイドラインに、新しい取組がどんなふうにコンテクストを汲み取って計画したのかという事例をいくつか示し、設計者の思考を促すような工夫が効果的ではないか。

・　近代化産業遺産のように、モノではなくストーリーを残す考え方も参考になる。一方で、ストーリーを誰が決めるのか、固定化するべきなのか等の議論もある。今生きている人がコンテクストを解釈して、自分の生活に役立てていけることが重要。

４　重視すべき部位と対応

⑴　通り景観としての視点（妻面、壁面後退により生じる空地、公共空間）

・　スケール感や壁面位置、庇の連続性などの面では一定のコントロールがなされていると感じる。

・　現在の景観誘導は立面図的なコントロールが中心だが、ストリートビューで見ると、駐車場や妻面、とりわけ中高層部のデザインなど、コントロールしきれていない部分が町並みに大きな影響を与えている。

・　京町家が失われ、駐車場やマンションに建て替わることで、隣接する建物の妻面が露出し、町並みの連続性が失われる現象への対応が必要ではないか。

・　セットバックによる空地は町並みの連続性を途切れさせる一方、その空間を高質な

パブリックスペースとして魅力的に活用することも考えられる。塀等による修景だけでなく、それらの両立の余地も検討できると良い。

・　車社会による駐車場の増加が通り景観へ及ぼす影響は大きい。駐車場の配置の適正化など、都市計画とも連動した対策の検討が必要ではないか。

・　路地性や辻子性が無くなった道が多い。

・　道路沿いの緑化は、壁面セットバックなどで失われる町並みの連続性を「ぼかす」役割を緑に持たせるなどが期待できる。

・　通りで景観形成を進めていくには、景観重要公共施設の活用など、道路などの公共空間を含めて考えることが重要。

⑵　材料

・　建築材料が景観に与える影響は大きく、これらをどう扱うかが重要。

・　林業振興や脱炭素と関連して木材活用をどの様に進めるかも議論の余地がある。

・　テクノスケープも重要な視点。アルミサッシなど反復して使われる工業製品がまちの様相へ与える影響は大きい。

・　京都らしい材料の利用や材料開発を含めて長期的に考えることが必要。

・　最後に信頼できるのは自然素材ではないか。

・　モザイクの要素には、素材の多様性も含まれていて良いと思う。

⑶　植栽

・　「緑」については、路地や坪庭といった内部空間の緑化、敷地境界の緑化、道路沿いの緑化など、多様な方法を検討するべき。併せて、遠くの寺社に見える緑など、様々なスケールの緑を横断的に捉えて考える必要がある。

・　町家は表には植栽を設けないが、奥庭など内部に植栽が設けられ、それが塀越しに見える。町並みの緑化をどのように進めるか検討する際には、そういったことをヒントにすると良いのではないか。

・　道路沿いの緑化は、壁面セットバックなどで失われる町並みの連続性を「ぼかす」役割を緑に持たせるなど、新たな役割が期待できる。（再掲）

⑷　機能や関係性に着目したデザイン誘導

・　町家の形態を模倣するだけでなく、内部の機能など、見えない奥深いところにあるものが外部に表出するようなデザインを誘導する必要があるのではないか。デザインコードもその様な事を考えて整備すべき。

・　無形文化遺産と有形文化遺産の関係性を読み解き、無形の活動をどのように「見える化」するかにフィードバックすることが大切ではないか。

・　庇を付けるなどの安直な規制ではなく、商いや会話の風景が見えたり、影の空間があったり、人の活動が現象する可能性を残すよう誘導すべき。

・　妻面の露出は、京町家が隣接する建物の存在を前提に作られているため生じる。現代は隣地との関係性が変化していることから、隣地との関係性を再考する必要があ

る。

・　隣地との関係性における妻面の処理を検討させるルールを導入することで、より本質的なデザイン思考を促せるのではないか。

５　デザイン誘導手法

⑴　創造性を引き出すデザイン基準

・　設計者が創造性を発揮できるよう、デザインコードは、具体的な形態の指示ではなく抽象的な目標を示すことで、思考を喚起すべき。

・　地域の大きな方針に対し、事業者側から創造的な提案を引き出し、協議によって質を高めるような仕組みがあると良いのではないか。その際に、地域の方針は提案を受け入れられるような「余白」をもつべき。

・　デザイン誘導において、機械的な形態の遵守を求めるだけでなく、「地域の人々が大切にしたいと考えていることに対してどんな工夫をするか」と問いかけるような形式の協議を行うと良いのではないか。

⑵　レベルに応じたデザイン誘導

・　デザインのレベルに応じた景観誘導の手法を考えるべき。

・　厳格な規制による誘導と創造的な良い作品の誘導が両立できる仕組みを考えられると良い。

⑶　運用状況や社会動向からのフィードバック

・　優れたデザインが既存の基準によって阻害された事例をレビューし、基準の緩和や見直しを検討すべき。

・　新しい技術、特に住宅に関するものをレトロフィットするときに、デザインコードに合わないことがあるが、住みやすい町とするためには、それらをどう考えていくかの検討が必要ではないか。

６　その他

⑴　景観調査について

・　景観調査の方法として、動画やドローンを使った点群データ分析など、より進化した方法を導入し、これまで見えなかったものを見える化すべきではないか。

⑵　屋外広告物による収益の活用について

・　屋外広告物を活用して得られた収益を、文化財の保存や景観保護に充てるような仕組みがあっても良いのではないか。

⑶　議論の場や人を育てる

・　幅広い人を巻き込んで景観賞やまちづくり活動に関するシンポジウムを行うなど、現代に評価するものを議論する場をつくることで、交流の機会を育てられると良い。

・　若い人などが、コンテクストを理解したうえで、まちづくりに参加できる機会を増

やしていけると良い。

⑷　段階的な取組

・　町は重層的で表と裏がある。コミュニティの話などは裏側も重要だが、まずは表のフレームから考えるなど、年次的な計画を考えておく必要がある。